

ほんにかえるプロジェクト 会報

2016年1月創刊

かえるのうた

第6号 2016・11月



画：松永 忠夫



2014年11月2日、第一支隊インディペンデント映画展
会場：東京女子大学（カリス）第一講義室
撮影：プロジェクトメンバー 井手 真



11月12日に自力更生支援活動の一環として、カリタス女子短大において、映画の上映会と講演会を主催いたしました。

プロジェクトの副代表であるシスター井手はケベック・カリタス修道女会に所属しています。同会が運営されていますカリタス女子短大の大教室を学長のご厚意により無料でお借りすることができただけでなく、上映料の大部分の寄付もいただきました。心から感謝を申し上げます。

さらに上映にあたり、カリタス学園のOGたちにもご協力をいただきました。本当にありがとうございます。

当日、遅刻魔の私をシスター井手がモーニングコールで起こしてく

ださり、建築関係の仕事をしているスタッフの秋元君が現場に行く前に車で駅まで送ってくれたにもかかわらず、高熱で飲んだ風邪薬と鎮痛剤の作用で電車の中で爆睡して、またしても遅刻しました。本当に皆様にご迷惑をお掛けいたしました。心からお詫びいたします。

なぜこの映画を上映したかというところ、アメリカには「アミティ」という更生支援プログラムがあります。いくつもの手法を用いたものですが、その中でも特に特徴として、元受刑者の意見を取り入れるだけではなく、元受刑者がスタッフとして刑務所に入り、受刑者にいろいろとアドバイスする点です。

更生を考える上では絶対に当事者の意見が必要です。机上論だけでは限界があります。ただ真面目になれと言っても意味がありません。多くの受刑者は真面目になりたいと思いつつも、どうすればよいのかわからないのです。再犯を問題にした時、必ず再犯した本人の努力が足りない結論付けるのです。本当にそうでしょうか。どうやって、何を努力するかについて誰が教えたのでしょうか。

そもそも何をもって更生ということについても議論する必要があると私個人的に思うのですが、一般論

として、正業に就き、定住所に住むことを更生と定義した場合、矯正当局も社会もこの二つの条件をクリアするだけの協力をしたとは言えません。

刑務所から出てきた者ですとわかればほとんどの元受刑者は職を失うのが現状です。前科があるから不動産の賃貸ができないということはないと思います。問題は前科のある人の身元保証人にだれがなってくれますか。受刑中に滞納した携帯電話の利用料金を全額支払わないと、自分の携帯すら契約できません。銀行口座も凍結された人が多い。

住所がなく、銀行口座もなく、携帯もなく、身元保証人もなく、履歴書に何年、時には何十年もの空白期間がある人を誰が雇うのでしょうか。おまけに名前をネットで検索したら犯罪報道記事がずらずらと出てくるし。

このような問題が存在し、それをどう乗り越えるのかについてアドバイスできるのは当事者しかありません。長期にわたる拘束は人間にいろいろな障害をもたらします。リハビリが必須です。そのリハビリの大前提として理解が必要です。

犯罪者が自分で犯した罪によって服役したのは事実だし(冤罪を除き)、社会的制裁を受けるのも当然という考え方があります。正論です。しかしその正論によって、社会復帰

ができず、さらに罪を犯すことになれば、本人は受刑すれば済むものでしょうか。社会はそれでよいのでしょうか。犯罪が増え、犯罪することでしか生きられない人が増える社会でよいのでしょうか。

なぜ加害者を支援するのですかと良く問われます。私は加害者でしたからではない。犯罪は被害者だけではなく加害者にも損害・損失をもたらします。日本国憲法でも保障されている基本的人権があります。神様の前でも人間はみな平等です。加害者も人間です。なくすべきなのは犯罪であって、人ではありません。住みよい社会とは弱者を生まないことも、労わることも大事だと思います。

映画のテーマの一つはアメリカでは「アミティ」という当事者による更生支援プログラムが生まれ、有効であるという話ですが、この映画の原作者でもある坂上香監督をはじめ、多くの方々の努力が実り、日本でも初の民営刑務所である島根あさひ社会復帰促進センターではこのプログラムを数年前から導入しています。

一方では、プログラムの要である元受刑者のスタッフを刑務所に招き、更生指導の現場に入らせることに至っておらず、さらなる努力が必要な状態です。わたしたちほんにかえるプロジェクトはこのプログラ

ムを高く評価し、元受刑者だから感じられる問題点を提示し、よりよい更生環境を整える手助けになればという思いで設立しました。

反省は1人でできても、更生は1人ではできません。と言われていません。受刑者本人がこのように言うと、助けてくれないと真面目にならないよという風に聞こえるかもしれません。実際はこの言葉を法務省の公文書にも使われ、矯正に関わる者の間では共通の認識にもなっています。というのも、受刑者が出所して、就職先と帰住地が決まらない者は再犯に走りやすいことは統計でもはっきりと出ています。その壁となっているのは社会の偏見ともいえます。元とはいえ、犯罪者と一緒に働きたくない、近くで住みたくないという考え方が存在するからです。

しかし、犯罪は誰しもしたくてしたわけではありません。その背景には多くの問題が存在し、その問題を解決せずに、本人に全責任を負わせ、更生しろと責めても効果が薄いことは再犯率の高さで表れています。本日お集りの皆様は教会にいらっしゃる方か、社会問題に強く関心をお持ちの方か、あるいはその双方であるかと思います。使う語彙は違っていても、考えは共通している部分はたくさんあると思います。皆様により再犯率の高さの問題を理解し

ていただくために、この映画を選ばせていただき、プロジェクトへの一層の理解と支援を賜りたい。

映画の上映後に私は20分ほど話をさせていただきました。そして無期囚のM氏をステージに迎えて、40年間受刑された当事者としての思いを話していただきました。あまりにも重い話でした。本人は涙ぐみ、それでも勇気を奮いたたせてどうして犯罪者になり、なぜ更生できなかったのかを赤裸々に話してくれました。話の詳細についてはプライバシー上の問題でここに掲載することは出来ませんが、本当に心を打たれました。

私は受刑中にフランクルの「夜と霧」をプレゼントされ、支援者に誘われてロゴセラピーの勉強を受刑中に始めたのです。出所後はゼミにも参加させていただき、同学と称して、同じ学問を学ぶ仲間にも恵まれました。今回の講演会にも3名の同学が来てくださり、感想メールまでいただきました。その一部を紹介したいと思います。

その前にメールの経験もない受刑者のために私が皆さんに送ったメールをまず載せます。

一斉送信ですみません。

汪楠です。15年ぶりのシャバは本当に変化が大きく、戸惑いどころか、いまだに時間管理も健康管理も金銭管理もできないこのころですが、見よ見まねで始

めた活動の方は以上軌道に乗りました。

2014年6月に出所し、2015年9月に設立した「ほんにかえるプロジェクト」も一周年を迎えることができました。報告書を添付しますので、読んで頂けたら幸いです。

もう一つお願いすることがあります。ほんにかえるプロジェクトは大変な資金難状態で、私がもう一回銀行でもダメしてこないと本当にやっていけないほどボールペンすら買えない状態にあります。受刑者に送る書籍の寄付に関しては本当にいろいろな方からご協力をいただき、在庫は6000冊に達しました。しかし、この寄付本を送る送料はなかなか集まりません。

ひとりの受刑者をサポートするのに資金ペースで計算しますと、6人の外部会員が必要です。プロジェクトには100名の受刑者会員がいるにたいして、外部会員はやっと50名です。

より多くの方々に再犯率の高さという社会問題に関心を持っていただくために、講演会を不定期で開催しています。今回は坂上香監督の「ライファーズ」を上映する運びになりました。アメリカの終身犯をテーマにした作品ですが、元受刑者が更生支援活動に当事者として参加するアミティというプログラムを紹介しています。

私も受刑中にこの映画の原作を読み、大変感銘を受け、出所後に同じプログラムを日本でもやろうと思い、皆様のおかげで「ほんにかえるプロジェクト」を立

ち上げました。本当に素晴らしい映画で、より多くの方々にこの映画を観ていただき、希望を見出していただきたいと思います。

チラシを添付しますので、ぜひぜひお越しください。

上映後に日本の終身犯とも言える無期懲役刑を全部で40年間も務め、昨年假釈保されたばかりのM氏のお話を聞く機会もあります。3000人もいる懲役刑受刑者。生きて出所できる確率はわずか0.2%程度です。ぜひこの機会を逃さず、当事者の話を聞きましょう。

塀の外の汪より

上映会に参加して①

映画「ライファーズ終身刑を超えて」

— 罪に向きあう —

チラシより

取り返しのつかない罪を犯したとき、人は罪に向きあい、償うことができるだろうか。

米国アリゾナ州を拠点とする民間の更生団体アミティは、刑務所や社会復帰施設で更生プログラムを積極的に行ってきた。創設者をはじめスタッフの多くが元受刑者や元薬物依存者というユニークな団体である。友情や友愛を意味するアミティの活動の特徴は、刑罰でも矯正でもなく、語り合いを通して生き方そのものを変革していくことだ。

ライファーズとは、終身刑もしく

は無期刑受刑者のこと。最も重い罪を犯した彼らが、アミティで自分の人生をさらけ出し、徹底的に罪に向きあっていく。そして、それを見た他の受刑者も、麻痺した心を開き、暴力への依存から自由になる道とともに模索していく。再犯の連鎖から回復の連鎖への転換がここにある。

映画を見て（映画の内容より）；

・仲間と話し合う場を持ち、仲間の良いところを言い合う。

・サンクチュアリ（安全な場所）

「あなたにとってのサンクチュアリとは？」

- ・子宮が最初 0 の安全な場所
- ・サンクチュアリがあれば人は強くなる
- ・サンクチュアリと聞いてどんなイメージが？参加者に答えてもらう。
- ・魂のところ・平和・安全
- ・信頼・祈り
- ・サンクチュアリを失ったときについて話し合う。
- ・アミティのプログラムのおかげで多くの人が立ち直っている。
- ・問題に至った原因について考えるようになった。
- ・自分の心に平和を築かなければ平和になれない。
- ・共感と信頼が必要
- ・家庭で小さい時から、非行や犯罪が始まっていた。
- ・自分たちの過去や思いを話したこ

とは決して他には話さない。

- ・キリスト教の文化の背景があるからできるので、日本では難しいかも。
- ・秘密をお互い守る。最後に皆で輪になって約束する。
- ・正直に話す人が自分の閉ざしていた心を開いた。本気で語っている。
- ・ライフアーズがサンクチュアリを提供している
- ・アミティに参加するようになって被害者の事を考えるようになった。
- ・裁判のときには被害者のことは考えなかった
- ・遺族のことを考えるようになった
- ・出所後、アミティの施設で1年過ごせる。
- ・アミティ LA 支部には100人いる。
- ・自由には責任が伴う。
- ・おれたちは変ることができる。そう信じることができるようになった。
- ・15歳の子どもが殺された。おれのヤクのため。銃で4発撃たれた。責任の取り方は2つ
- ・報復する。
- ・死者に人の役に立つことで敬意を払う。
- ・世界の子どもを救うことができる。
- ・悪魔の手先だった兄が変わることができた。見本になった。
- ・ライフアーズが出所できるかどうかは被害者の遺族の許しがあるかも大きな判断基準。映画では、遺族の許しがなく出所できない人と、出

所できた人が取り上げられていた。出所できないライフアーズが仲間のケア（相談）に乗っている。

汪さんのお話；

- ・50%が再犯
- ・一人で反省できるが、一人では更生できない。
- ・本人の努力だけでは超えられない。
- ・自己責任を否定しているようだが、出所してからの社会環境が厳しい。支援が乏しい。
- ・家族とも疎遠になっている。
- ・刑務所を出ても、住むところも仕事もない。
- ・昔、無期懲役は模範囚だと15年ほどで出所できたが、今はとても少ない。

無期懲役その後出所したが再犯して40年刑務所生活の方のお話

- ・心に希望と目標を持てば、人間誰でも生まれ変わる。
- ・無期懲役の人の手本になるように長生きして自分の罪をつぐないたい。
- ・仕事に就くことができたが、仲間が自分の過去を職場で話した。それにより会社にいられなくなった。それで何となく福井に行った。しかし、保護観察司に言わなかったので重要事項報告違反で福井に行ってから1か月後に逮捕されて刑務所に戻ってしまった。

・「人にありがとう」と言われて更生できた。

・「ありがとう」と言えないと更生できない

井出愛子シスター

(HKP副代表)；

・許す力。この許す力を持ちたい。許せないといつまでも自分がそれに囚われている。

・ポジティブシャワーは良い。自分の良いところを言ってもらうのは前向きになれる。

・映画でお互いに“手を読む”作業をしていた。これは良いと思った。

感想

脇坂盛雄

副代表の井出愛子シスターはケベック・カリタス修道女会の方でした。“かえるのうた”によく寄稿されているのでどんな方かなと思っていました。帰る時に、声をかけてくださいました。シスターは「汪さんはロゴセラピー、ロゴセラピーと言っている」とおっしゃっていました。そのロゴセラピーのきっかけを与え、今も中島さんが支えておられます。

人は変えることがいつでもできるのだと思いました。ただ、それは何かのきっかけが必要であり、誰かの支援が必要なんだと改めて思いました。シスターもそのお一人なんで

上映会に参加して②

松下敬子

こんばんは。

中島長老や脇坂さんに続きまして、私も一言感想を書かせていただきます。

初めての場所ではほぼ 100%迷う方向音痴ですが、今回のあざみ野でもやはり迷ってしまいました。

前の晩ぎりぎりまで自分の体力気力に問いかけていましたが、結局は「協力しているならしっかり理解しなければ」という気持ちでワンさんに電話し、参加したのですが。

以下、感想です。仕事の合間に書いたので、ストレートな表現です。お許し下さい。

終身刑を言い渡されて「ライフアーズ (Lifers)」となった受刑者が、アミティという更生プログラムで人間としての尊厳を取り戻していく。でもそれがそのまま仮釈放に繋がるわけではない。

被害者の手紙に助けられて仮釈される人と、アミティでどんなに皆の手本になっていても許されない人がいた。

毎年行われる仮釈放に関する審判。その場では、仮釈放が認められないという結果の方が圧倒的に多いという。

その瞬間には、塀の中で一生を終

しょう。社会の支援も必須ですが、誰か人と人のつながりの支援。

汪さんはそれを実感されているからこそ、今ご自分がそれをなさっているのでしょう。まさに、これまでの人生を生かす働きをされていると思いました。人生からの問いかけに答えて行こうとされています。

姜尚中さんは在日朝鮮人で、初めて捺印拒否に名乗りを上げられ、とても苦労されました。就職もなかなか見つかりませんでした。しかし、姜尚中さんを支える日本人がいました。差別するのも日本人、支援するのも日本人。姜尚中さんは支援する日本人がいたからこそ、今があります。

マザー・テレサさんが日本で講演した時に、ある女性が「私もカルカッタに行きお手伝いしたい」とマザー・テレサさんに言いました。マザー・テレサさんは「あなたの身近であなたができることがたくさんあります。それをぜひしてください」と伝えました。大きなことはできなくても自分ができることからすることなのでしょう。自分の目の前にある、私ができることを。



えるかもしれないという恐怖？ 苛立ち？ 悲しみ？ 後悔？

きっと色々な感情が駆け巡るのだろう。

殆どが幼少期に性的虐待を経験し、母親との関係も上手くいかなかった受刑者たち。

映画の最初の場面で審判の部屋に入り、最後の場面でまた堀の中に戻る受刑者の表情が映る。

またアミティの支援者として、そして被支援者のひとりとしてそこで生きていく。

彼自身がどんな気持ちなのかわからないが、圧倒的な法の力のもとでは、こんな責任のとり方があるのだと納得した。

誰に認められなくとも、塀の中だろうが外だろうが、被害者と家族への償いのあり方を問い続ける。

そうあり続けることに意味がある。そう思えた。

「かえるのうた」をじっくり読んだ。そこにはワンさんの苦しい状況があった。

受刑中の会員が多数となり、支えきれなくなっているという。ルールを守らない人もいるという。映画のアミティのようにはいかない。

でもワンさんはにっこり笑顔で元受刑者だった方をサポートする。

「希望」と「ありがとうの言葉」

に勇気づけられて塀から脱し、今壇上に立った M さん。

涙で言葉が詰まる。こちらも涙が出そうになる。

今 71 歳のその方は、今までの人生を意味あるものとすべく、シルバー人材センターから社会デビューしたそうだ。

壇に上る前の彼の表情は、まるで観音様のように柔和だった。

ワンさんの自伝「我的童年」、今日読み終わりました。

私は精神の反抗力のない幼少期を送りましたが、ワンさんはなんて自由な精神次元を持った幼少期をおくられたことでしょう。

しっかり自分というものを持っていらしたのですね。

思いやりも観察力も凄いいと思います。

そんなワンさんが暮らしている場所から遠くにいる私にできることは少ないかもしれません。

脇坂さんが書かれたように、マザー・テレサの「あなたの近くにある事から始めて下さい」という言葉が教訓です。でも切手ならクリニックでもたくさん使います。知っている人にも聞いてみたいと思います。

これからもそのくらいの協力でしたら出来そうです。



皆様のご支援とご協力のおかげで無事上映会を主催することができました

心から感謝を申し上げます。

次回は練馬区保護司会にてパネルディスカッションの形で行います。パネラーは練馬区の教育関係者と保護司である。

ご存知の方もいらっしゃると思いますが、保護司会は法務省の外郭団体です。そこで刑務所の問題点をも指摘するのはある意味KYですね。それでも怯まずに問題を提起していきたい。

共通の目標である明るい社会をつくるために。

かえるのおすすめ

かえるのうたの誌面についての意見が数多く寄せられています。

中でも更生に役立つ図書の紹介をしてほしいという要望を頂いています。中のかえるメイトからこのような意見をいただくのは本当にうれしいことです。更生は押し付けられるものではありません。更生は

私たちにとっても必要なものです。さらに言えば、私たちに更生する権利があります。生きる権利です。生きるには社会と調和する必要があります。刑務所はその更生ができるように環境を整える義務があり、社会にもそれが求められていると考えます。プロジェクトも社会の一員として、更生できる環境を整える努力をする所存です。

さて記念すべきおすすめの

第1冊目はやはりこれでしょう。

ライファーズ 罪に向きあう



坂上香 著

みすず書房

2012-08-21

・日本の刑務所では、罪を犯した人がその犯罪行為を根本的に考えるようなプログラムが不十分だ。少なくとも、当時はほとんど行われていなかったし、そのニーズに気づいているとも言いがたかった。日本でも、受刑者の多くに深刻な虐待の被害体験があるはずだが、被害の有無や詳細は、直面しようとしなければ出てこないはずだ。また、自らの被害体験に向き合えなければ、加害体験に向き合うことさえ難しいという

のが、私が米国での取材を通して痛感してきたことである。**刑務作業や職業訓練中心の服役では、被害にも加害にも向き合えるはずはない。**

・アミティとの出会いを取り持ってくれたのは、世界的に著名な元精神分析医のアリス・ミラーだった。ミラーは「暴力の世代間連鎖」という問題に着目し、1970年代から数々の著作を通して世界に警告を発してきた。彼女の考え方はこうだ。子ども時代に受けた深刻なトラウマを放置していると、成人後の暴力傾向を促し、それが世代を越えて脈々と受け継がれてしまう。ここでいう暴力とは、他害はもちろんのこと、自傷行為や薬物依存など、自分に向くものも含まれる。その暴力の悪循環を断ち切るためには、子ども時代の記憶に立ち戻り、受け止める必要がある。

・子ども時代から一人の人間として当たり前前に生きる権利を奪われてきた人々に共通してみられる「症状」を、ナヤは「子ども時代を剥奪された者の文化」と名付けた。

・アミティでは、プログラムの運営に関わるスタッフのことを「デモンストレーター(体現者)」と呼ぶ。その大半が当事者である。彼らは「人は変わることができる」ということを、かつての自分や現在の生き様を示すことによって体現するという重要な役割を担っている。(中略)デモンストレーターは、ある共同体で人間的成長を体験した者でなければならない。いかなる人生を

送ってきたか、どんな問題を抱えていたか。それらにどう向き合い、どう乗り越えてきたか。さらには、今をどう生きているか、それが将来にどうつながると思うか。過去から未来に続くストーリーを語り、自分を丸ごとさらけ出すことによって、他者の人生に揺さぶりをかける。目の前の他者は、かつての自分だったともいえるのだ。このプロセスを、ナヤは「番号から名前の旅」と名付けた。刑務所では通常、名前ではなく受刑者番号で呼ばれる。アミティのプログラムは、逆に、彼らが自らの名前を取り戻していくことを後押しする。

・「墓場にまで持っていくつもりのことを話さなければ、本音を話したことにはならない」。このフレーズを、アミティ関係者の口から、何度聞いたことだろう。被害体験であれ、加害体験であれ、体験の詳細と、それに伴う感情を、徹底的に、何度も語るというのがアミティのスタイルだ。

・「ヤク中」「犯罪者」「極悪人」というレッテルを貼られたレジデントたちの多くが、実はかつての「被害者」だったわけだが、ファンを含むレジデントのたちの多くが、それを認めたり、人に知られたりすることに、強い抵抗感を抱くからである。アリス・ミラーも指摘しているように、辛い記憶に蓋をして、被害自体をなかったことにしたり、自分のために思って親は自分を殴ってくれたと歪んだ解釈をしたり、も

しくは子ども時代を完全に美化して生き延びている人がいかに多いか。

・**受刑者だって笑う。**吹き出すこともあれば、爆笑もする。苦笑いだって、泣き笑いだってする。ジョークだって言うし、からかいあつたりもする。不謹慎だという人もいるだろう。(中略)しかし、アミティのプログラムに参加していても、レジデントたちは**四六時中頭をうなだれて反省しているわけではない。**24時間、過去の虐待被害に思いを馳せているわけでもない。むしろ、自らの被害体験や加害体験を受け止め、新たな生き方を得るためにも、こうした人間的な交わりが欠かせないのだ。

・受刑者の大半は釈放され、やがて社会に戻ってくる。刑務所内でも素行が良くても、環境の異なる社会に出て、孤立した状況で、**個人が問題を乗り越えていくことは困難だ。**たとえば、米国では刑務所での生活に適合した者ほど、社会復帰後の生活が困難になるという調査結果がある。

・近年の日本は、米国が厳罰化や社会的排除の傾向を強めた1980年代から90年代の状況と、いろいろな意味で重なる。

・社会から隔離され、刑務所で仕事をすれば罪の意識が自然に湧いてくるわけではない。罪に向き合うことを一人で行うことも不可能だ。

(中略) TC や修復的司法、薬物裁判所や社会内処遇、社会福祉的な措

置やアートプログラム、それらの緩やかな連携……犯罪や暴力への対応は、個に閉じられていくのではなく、社会とのつながりを意識し、新しい関係性を構築する、もっと多様で柔軟な発想やアプローチがあってもいいのではないかと思う。

(坂上香さんの文より転載)

この本は今でもアマゾンで入手可能です。2400円前後で数冊が出品されています。私は2冊を持っていましたが、何回も貸し出しているうちに所在不明になりました。

坂上さんとは個人的にも知り合いで、監督の周辺の方に養子縁組の身元保証人になっていただいたこともあり、今もご支援をいただいております。

アミティに興味がある方はぜひデモンストレーター(体現者)として共に頑張りたいですね。

ほんにかえるプロジェクトは会員を募集しています。正会員の年会費は3000円。寄付もお待ちしています。振込先
ゆうちょ銀行
10160-86239211
他行からの場合
ゆうちょ銀行018支店
(普) 8623921
口座名義は
ほんにかえるプロジェクト